令和５年度文部科学省委託事業　体験活動等を通した青少年自立支援プロジェクト
「チャレンジ＆チェンジ！2023」（国立立山青少年自然の家）

試行・検証等のテーマ　先駆的、モデル的な取り組み

背景・課題

新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により、子供たちの遊びや体験の場、本物に触れるなどの体験活動の機会が減少するなど、子供たちを取り巻く閉塞感を打破することが喫緊の課題である。この課題に対し、これまで当所で得られた知見である「長期キャンプによる自己肯定感の高まりや基本的な生活習慣やコミュニケーション能力、規範意識などの社会性の向上」を活用し、特に教育効果の高い長期の自然体験活動事業を実施し、青少年の自立支援を推進する。

事業のねらい

新たな時代のニーズであるSDGsを踏まえ、多様な課題に立ち向かい、相互に協力して解決していく「課題解決力」の醸成を目的に実施する。本事業では多様な主体と連携しプログラムを推進し、さらに当施設が取り組んできた特色化及び実践研究事業での成果やノウハウを生かした先駆的な長期宿泊モデル事業に取り組む。

事業内容

＜実施にかかる体制＞
国立登山研修所との連携体制・専門登山ガイドとの連携体制・スタッフ研修・ハード面での安全体制・参加者自身の安全意識の向上

＜テーマに基づいた試行、検証等の方法＞
「SDGsを踏まえた課題解決力養成に着目した長期宿泊モデル事業の試行」
〇主体性重視を軸にプログラム構成、指導体制を構築し、仲間との対話を通じた深い気づきと学びのあるプログラムと指導体制
〇環境教育的な学習を通じた理解と課題解決へのグループディスカションの導入
〇プロセスの中で生じる葛藤やトラブルを仲間と主体的に解決していくことを重視
〇ゴール設定を自己成長とともに、地域でのアクションや探究的意識が生まれるよう導入やまとめの中での個人セッションや共有ディスカションを設定する。
＜活動の内容＞
〇実施期間　令和５年８月５日（土）～８月１４日（月）【９泊１０日】
〇実施場所　国立立山青少年自然の家
〇参加者属性、人数　２３名
（小学５年生５名、小学６年生５名、中学１年生７名、中学２年生３名、中学３年生４名うち県外参加者７名）
〇具体的なプログラム内容
・班活動　・野外炊事　・マイクロプラスチック採集、海岸清掃　・海水浴　・釣り　・自転車　・登山

成果

〇長期プログラム構成により、仲間との強いつながりが生まれ、主体性が高まる。
　キャンプ中盤以降、互いに強いつながりが生まれ、周りとの関わりに柔軟に対応できるようになった。「お互いに何でもいい合える関係になっている」と振り返っている。「チームワーク」についての評価の数値が高いのは、より強いつながりの関係になっていたからだと考える。
　さらに、キャンプ前半の自分のめあては「仲間に声をかける」「仲間を手伝う」という内容だったが、「班のチームワークやまとまりをもっと高める」や「チーム全体が団結して登りたい」というように仲間意識の高まりを目指して進めたいというめあてに変容した。登山②や登山③の日の振り返りにおける自己評価が、平均的に低くなっているのは、子供たちの目指す姿が高くなっている表れであると考える。登山③の後には、「登山最終は、一体感をもって登れた」「仲間を思いやりながら登りきれた」と振り返り、より高い自分、よりよい仲間関係を目指して活動していたことが分かる。
〇参加者から寄せられた意見
　ぼくは、自分の行動に自信がもてませんでした。普段の生活も、初めて会う人と話すときは、オドオドして微妙な行動をし、雰囲気を悪くすることがよくありました。この活動に参加した初日も、そんな様子でいました。　しかし、班の仲間と話をし、日を重ねていくうちに、自分から声をかけ、協力するようになりました。ぼくは人と仲良くなるためには自分から進んで声をかけることや一歩前に思い切って踏み出してみることが大切だと思いました。いろいろ考えて、悩んで分からないまま行動するよりも、自分からとりあえずチャレンジしてみる方がいいと気付きました。仲間とのチャレンジが終わっても、みんなそれぞれまた新しいチャレンジに向かっていきます。これからは、自分を信じ切り、チャレンジし、また新たな自分にチェンジし続けたいです。思い切って一歩一歩進んでいきたいです。

今後の展開

〇9泊10日の長期キャンプの継続
　9泊10日の長期のキャンプの有効性を図るため、継続して長期キャンプを行い、子供たちの主体性、問題解決力の育成について検証していく。
〇異年齢集団における仲間づくり活動の工夫
　泊数を増やしたことで、海での活動と川での活動を行い、環境について考える機会を設けることができた。さらに、自転車行程と登山行程のハードな活動を仲間とともに達成していく中で、仲間意識が大きく高まる姿が見られた。また、中学生の集団をリードしていく成長の姿も見られた。
　今後は、小学生、中学生の異年齢集団づくりに重点をおき、より仲間意識をもって主体的に、チームワークを高めていくための活動を展開していく。出会いから自転車行程、登山行程に臨むまでの仲間づくり活動の内容の工夫をしたり、プログラムの中での主体性、仲間意識の高まりを目指した活動の充実を図ったりすることで、中学生がリーダーとなり、より主体的な異年齢集団を構築しながら課題解決の力を育成していく。